

エクリチュールと「革命」——太宰治『斜陽』

滝口明祥

人は、なぜ書くのだろうか。誰かに何かを伝えたいために？ それとも、自分の考えをまとめるために？ 前者であれば、すでに書く内容は固まっているのであろうし、後者であれば、書き始める前はまだ考えが固まっておらず、考えながら書くことになるはずだ。だが実際には、両者はそれほど截然と区別できない場合のほうが多いのかもしれない。誰かに何かを伝えたいのだが、伝える相手も具体的にいるわけではないし、伝えたい「何か」もまたよくわかっていないわけでもないのだ。したがって、人は書きながら、自分が誰かに訴えたい「何か」を探し出そうとする。

そして、そのようにして誰かによって〈書かれたもの〉を読むとき、人は多かれ少なかれ戸惑わざるを得ない。特に、それを書いた者について、それほど知っているわけではないときは。いや、本当はよく知っている者によって〈書かれたもの〉であっても、それを常によく理解できるとは限らない

のだが、それでも人は〈書かれたもの〉の意味を確定するための〈作者〉についての情報を知らたがる。だから、たとえば文学作品においては、その〈作者〉についての情報がさかんに流通することにもなる。〈書かれたもの〉はコンテクストによって意味はいかようにも変わり得るのであり、だからこそ人は意味を確定するためのコンテクストを欲するのだ。

だがたとえば、太宰治の『斜陽』（新潮社、一九四七・一二）のような、登場人物によって書かれた手記によって作品が成立している場合、意味を確定するための〈作者〉とは、はたして現実の作者・太宰治なのか、それとも作中で手記を書いた登場人物なのか、どちらだろうか。ある時点まで、それは太宰治のことではなかった。主な登場人物はすべて太宰の分身であるとされ、一九四八年六月の太宰の死という情報的前提にして、“滅び”あるいは“再生”が描かれていると考えられていたのである。¹⁾

一九九〇年代以降は、登場人物のほうに視点が移り、この小説がヒロインかず子の手記によって成立しているという前提のもとに、その手記の構造について考察する先行研究も出てくるようになる。たとえば、高田知波は、『出来事』の時間とかず子の《語り》の時間とが、単純な進行形でもなければ単純な回想でもないダイアレスティックな関係を形成している²⁾ことを指摘している。つまり、かず子の手記は、出来事が起きているなかで幾度かに分けて書かれているのであり、しかもそのようにして〈書くこと〉が作中の出来事に影響を与えていると考えられるのだ。

本稿もこの高田の指摘に多くの示唆を受けつつ、『斜陽』という作品の特徴について考えていきたいと思うのだが、その前に全体の構成を確認しておこう。「一」から「八」までの八章に分かれており、その大部分はかず子の手記だが、しかしそれだけではない。「三」には直治の「夕顔日誌」が挿入されており、「四」はかず子による三通の書簡で構成され、「七」の大部分は直治の遺書であり、「八」の大部分はかず子の書簡である。『斜陽』は多種多様な〈書かれたもの〉の集積によって成立しているのだ。この作品は、往々にして女性独白体小説の一つに数えられるが、たしかに特定の相手に向けられたわけではない女性による語りという点では共通性があるものの、『斜陽』はかず子の手記や手紙など〈書かれたもの〉によって構成されていることが明らかであるとい

う点で、文字通りの「独白」と捉えられる他の女性独白体小説とは一線を画する。本稿は、そうした〈書かれたもの〉の集積であるという『斜陽』の特質について考察するものである。

一、「あ。」の反復

まずは「一」を読んでいこう。場所は「朝の食堂」であり、「私」の母親が「あ。」というかすかな叫び声をあげるところから始まる。しかし「私」は、その「あ。」について、すぐに説明しようとはしない。読者の疑問を宙づりにしたまま、弟の直治がいつか「私」に言ったというセリフが紹介される。「爵位があるから、貴族だといふわけにはいかないんだぜ」と言う直治は、自身や姉を含めて「華族なんてもんのもの」の大部分は、高等御食とでもいつたやうなもの」なのに対して、母親だけは「ほんものの貴族」なのだと言語。「あれは、ほんものだよ。かなはねえところがある」。

ここで読者は、「私」と、その母親や弟が、かつて華族と呼ばれていた人々であることを知ることになる。華族令は日本国憲法が施行された一九四七年五月で廃止されているので、『斜陽』が発表されたときにはすでに華族という身分はなくなっている。作中の現在時は「一」の最後のあたりで一九四六年四月であると明かされるが、この時点ではわからな

い。だが華族という身分がなくなることを知っている読者は、漠然とした「滅び」の予感を抱きながら、読み進めていくことになるだろう。

そして「私」は直治の言葉に導かれながら、「ほんもの」の貴族である母親と、そうではない「私」との差異を語っていく。正式礼法から外れながら「軽く鮮やか」にスープを飲む母親に対して、正式礼法通りにふるまう「私」の所作は「陰気」とされることにもなる。ここでは「貴族」という言葉が通常とは異なる意味で使用されている。ふつうは爵位のある／なしという二分法が、そのまま貴族／庶民という二分法を意味することになる。しかし、直治はそれに異議を唱えているのである。「ほんもの」の貴族／「高等御乞食」という二分法においては、爵位のある／なしは何の意味も持たないのだ。母親が「ほんもの」の貴族であるのは、爵位があるからではない。そうではなく、「天爵」とでも言うしかないものが母親には備わっているからなのである。そのような定義が、「直治」＝「私」の言説のなかで構築される。いや、よく読めば、「私」は直治の言葉にはない要素を追加している。「私」は、母親が「ほんもの」の貴族であることを言うときに、「とても可愛らしく」、「しんから可愛らしい」などと言うのである。「私」にとって「ほんもの」の貴族とは「可愛らしい」ものなのだ。

「私」は、そのように母親を「ほんもの」の貴族であり、

自身とは違うものだ」と位置づけたうえで、「あ。」というかすかな叫び声に戻ってみせる。「私」が「髪の毛？」とか、「塩辛かつたかしら」と聞いても、母親は否定する。「あ。」の意味は結局、よくわからない。だが、そのすぐ後で、今度は「私」自身が「あ。」という声を出すこととなる。そして「私」は、理解する。「何か、たまらない恥ずかしい思ひに襲はれた時に、あの奇妙な、あ、といふ幽かな叫び声が出るものなのだ」と。「私」にとって、それは「六年前の私の離婚の時のこと」だった。そして、母親にとっては、それは直治のことであったということが明かされる。ここで、直治は「大学途中で召集され、南方の島へ行つたのだが、消息が絶えてしまつて、終戦になつても行先が不明」であるということがわかる。ただ、「私」が離婚した際の「恥ずかしい思ひ」とは、いったいどういうことなのか、という新たな疑問も、読者の中には生まれるだろう。

生死が不明の直治のことを思う母を心配させまいとして、「私」は、綺麗なひとは早死にするが、悪漢は長生きする」という論理を持ち出す。だから「悪漢」である直治は死んでいないのだと言いたいがための論理だったが、それはかす子を袋小路に誘い込むことになる。母親には長生きしてもらいたいが、そうすると母親は「悪漢」になり、母親は「綺麗なひと」だとすれば早死にしまうことになる。「私」はどちらも選べず、涙を流すのだ。

その後、一行空きがあり、「蛇の話をしようかしら。」と唐突に話題が転換される。四、五日前に「私」が近所の子どもたちと蛇の卵を焼いてしまったというのだ。その蛇のエピソードに絡めて、一〇年前に自身の父親が亡くなった際のことと回想される。そこで「私」は父親が亡くなった際は一九歳で、現在は二九歳だということも明かされる。そして、蛇に対して「畏怖の情」を持っているという母親が次のように描写される。

夕日がお母さまのお顔に当つて、お母さまのお眼が青いくらゐに光つて見えて、その幽かに怒りを帯びたやうなお顔は、飛びつきたいほどに美しかった。さうして、私は、ああ、お母さまのお顔は、さつきのあの悲しい蛇に、どこか似てゐらつしやる、と思つた。さうして私の胸の中に住む蝮みたいにごろごろして醜い蛇が、この悲しみが深くて美しい美しい母蛇を、いつか、食ひ殺してしまふのではなからうかと、なぜだか、なぜだか、そんな気がした。

もちろん「夕日」という言葉は「斜陽」というタイトルと呼応しているだろう。それはこの場面の重要性をこれ以上ないほどに証立てている。美しい／醜いという二分法は、その日の朝に「私」が持ち出した論理で言えば、死／生という二

分法に重ねられる。しかもここでは、単に「美しい」と「死」が、そして「醜い」と「生」が結び付けられるだけではなく、「醜い」「私」が「美しい」「お母さま」を「食ひ殺してしまふ」という過剰なイメージが持ち出されるのだ。その過剰さに、読者は戸惑わざるを得ない。

そして、また一行空き。「私」は、四、五日前よりもつと過去のことを語り出す。もともと「私たち」は、東京の西片町に住んでいたのだが、「日本が無条件降伏をしたとしての、十二月のはじめ」に伊豆の山荘に引越してきたのだという。なぜ引越すことになったかというところ、お金が無くなったからである。もちろんそこには父親が一〇年前に亡くなったことが関係しているだろう。まだか子が一九歳のときに亡くなるというのは、相当に早死であると言える。もう少し長生きしていれば、これほどまでに早くこの家族が経済的に困窮するということはなかったはずだ。そして、父親が亡くなって以降、「私」や直治は母親にいろいろな形で心労をかけていたことも示唆される。そのなかで、「私」が子どもを死産していることも明かされるのだ。ここで読者は、「私」の「あ。」の内実をいくらかは知ることになるだろう。

伊豆に引越すというのは、母親の意思ではなかった。経済的に庇護してくれている叔父の考えであり、母親の本心は「お父さまの亡くなったこの家で、お母さまも、死んでしまひたいのよ」というものだった。だからなのか、伊豆の山荘

に引越したのち、母親は高熱を出す。「私」は、「お母さまが、お可哀想でお可哀想で、いいえ、私たち二人が可哀想で可哀想で、いくら泣いても、とまらなかつた」とか、「もう私たちは、何も要らない。私たちの人生は、西片町のお家を出た時に、もう終つたのだと思つた」などと書くのだ。「私たち」は、ここでは「私」と母親の二人を指す。「私」はここで母親と一体化している。「美しく」、「可愛らしい」「お母さま」との一体化は、「私」にとって甘美なものでもあつただろう。

しかし、母親の体調は回復する。母親は、「神さまが私を一度お殺しになつて、それから昨日までの私と違ふ私にして、よみがへらせて下さつたんだわ」と言う。そして「四月のけふ」まで、表向きは安穩な生活を送っていると言ふ。「私」は、しかし母親の言葉に納得できてはいないようだ。何故なら、「私」も母親も「あ。」というかすかな叫び声を出すではないか。一九四六年四月という時点において、自分たちが少しも終戦以前の過去から切り離されていない、「私」は書く。

ああ、何も一つも包みかくさず、はつきり書きたい。この山荘の安穩は、全部いつはりの、見せかけに過ぎないと、私はひそかに思ふ時さえあるのだ。これが私たち親子が神さまからいただいた短い休息の期間であつたと

しても、もうすでにこの平和には、何か不吉な、暗い影が忍び寄つて来てゐるやうな気がしてならない。お母さまは、幸福をお装ひになりながらも、日に日に衰へ、さうして私の胸には蝮が宿り、お母さまを犠牲にしてまで太り、自分でおさへてもおさへても太り、ああ、これがただ季節のせみだけのものであつてくれたらよい、私にはこの頃、こんな生活が、とてもたまらなくなる事があるのだ。

「私」のこの手記がなぜ書かれなければならなかつたのか、と言へば、この部分に集約されるであろう。「私」は、実は過去から少しも切断されていないにも関わらず、切断されたかのようにして安穩とした日々を送っている現在を「いつはり」と感じ、そこから抜け出したいと思つているのだ。言い換えれば、「私」は表面的には変化しているように装いつつ、実は少しも変化していない状態から、真に変化することを望んでいるのである。

しかし、それは容易なことではない。何故なら、「お母さま」と母子一体化しているかのような日々は、「私」にとつて心地よいものであり、甘美なものでさえあるからだ。この「一」において、「私」は、過去の直治の発言や、四、五日前の蛇の卵を焼いた話などを利用しながら、母子一体化の日々から抜け出そうとしているのだが、それは「私」にとって、

滑らかに書けるようなものではなかった。二度の一行空きは、そのことを証立てている。「一」を書き始めた当初、

「私」は四、五日前のエピソードを書くつもりはなかったのだろう。だが、そのエピソードは必要だった。なぜなら、そのエピソードを通して、「醜い」「私」が「美しい」母親を「食ひ殺してしまふ」という過剰なイメージが付与されるからである。言い換えれば、そうした過剰さがなければ、「私」が「いつはり」の日々から抜け出すことは不可能なのである。

しかも実は、それだけではまだ十分ではないのだ。「一」は、次のように終わっている。「恋」と書いたら、あと、書けなくなつた。「私」が母親との甘美な一体化から己の身を引き剥がすためには、さらに「恋」が必要なのであつた。しかしここでは、それがどこへ向けられているのかはまだわからっていない。「恋」という単語しか、「私」には書けない。

「一」において、この小説の基本的な設定は示されている。これは終戦後、伊豆に引越してきた華族の娘が書いている手記であり、現時時は一九四六年四月である。翌年五月の華族令廃止に先立ち、お金がなくなつてきているこの家が「滅び」の道を辿りつつあることも、読者にはすでに了解されてはいるはずだ。

二、〈書くこと〉と〈読むこと〉の交錯

「二」に入ると、「私」が火事を起こしたことが語られる。

「私」はそれを「蛇の卵があつてから、十日ほど経つた頃だと説明する。蛇の卵を焼いたのは「一」を書いた日の四、五日前なのであるから、「私」が火事を起こしたのは「一」を書いた日の五、六日後ということになる。であれば、「その五、六日後」などと書けばよさそうなのであるが、ここで「私」がわざわざ「一」を書いた日より前に起きた蛇のエピソードを持ち出しているのは、火事を起こしたことも蛇の卵を焼いたことも、「私」が母親からますます違う存在になつていく契機であるとして、「私」の手記では語られるからである。

そして、それを補強するための材料として、戦時中の徴用の経験が語られる。「私」はあのヨイトマケのおかげで、すっかりからだ丈夫になつたのだとされるのだ。徴用の経験もまた、「私」と母親とを分かつものである。そのおかげで「私」は戦後の現在も畑仕事をするのできるのだし、徴用の経験がない母親は畑仕事を少し手伝つただけで翌日は「寝たきり」になつてしまう。さらに「蛇の卵」と「火事」があつてから、母親は「めつきり御病人くさく」なつたのに対して、「私」は「だんだん粗野な下品な女になつて行く」のだ。

だが、「私」はそうやって順調に母親とは違う存在になつていくかというところではない。火事を起こした際に母親の言葉に慰められ、「お母さまのしづかな呼吸と私の呼吸がびつたり合」う経験が語られているように、いまだに「私」として母子一体化は甘美なものであり続けている。

だから「初夏」である「けふ」、母親から直治が帰つてくるといふ話を聞いた「私」は、「からだを固く」するのだ。そして、経済的に庇護してくれている叔父も二人ならばともかく、三人分の生活費を出すのは難しいということで、「私」がある宮様の家にご奉公にあがる話が持ち上がる。だがその話を聞いた「私」は激しく反発する。三人を二人にしなればならないというのは、榊原理智が言うように経済的な問題であるはずだが、「私」にとつては、それは第一に愛情の問題であると感じられているようだ。「私」は母親が自分よりも直治と一緒にいたいのだと思ひ、それに反発するのである。

「私」は「行くところがあるの」と母親に言い、「だんだん、或るひとが恋ひしくて、恋ひしくて、お顔を見て、お声を聞きたくてたまらなくなり」と書く。「一」では、「恋」という単語でしかなかったものが、だんだん方向性を取り出している。母親への反発が契機となつて、「恋」の対象が仄見えてくる。それは逆に言えば、母子一体化から逃れる必要がなかったのであれば、「恋」の必要もなかったということ

意味しているのではないだろうか。

だが、母親に「あんなに毎日の畑仕事は、あなたには無理です」と言われ、「二人の着物をどんどん売」つて、三人で生活していこうと提案されると、「私」は母親に謝罪し、また寄り添うのである。母子一体化の引力は、きわめて強い。

「三」では、直治はすでに帰還している。そしてここでは書き手としてではなく、読み手としての「私」が登場する。

「私」は直治が麻薬中毒にかかつていた高校生の頃に書いていたと思われる「夕顔日誌」を読むのだ。それは当時の直治の混乱した日々がそのままに表れているかのような、断章形式の手記であつた。

それを讀んだ「私」は、「夕顔。ああ、弟も苦しいのだから。しかも、途がふさがつて、何をどうすればいいのか、いまだに何もわかつてゐないのだから」などと感想を記す。「何をどうすればいいのか、いまだに何もわかつてゐない」のは、直治のことであると同時に「私」のことでもある。

「私」は、直治の手記を内在的に理解しようとしている。それは、手記を書いている現在の「私」だからこそ可能になつたことであるはずだ。

そして、書き手としての「私」が読み手としての「私」に影響を与えらるとともに、読み手としての「私」は書き手としての「私」に変化を与える。「不良でない人間があるだらうか」という「夕顔日誌」のなかの言葉から「私」は、「不良

とは、優しさの事ではないかしら」という認識へと至る。「夕顔日誌」を読むことで、そして「三」を書くことによつて、「私」は「不良」という言葉に新たな意味を付与することができるようになったのだ。それは「私」にとつて、世間からは「不良」とみなされるような行為をする勇氣を得ることにもつながつたはずである。

また、「私」は「夕顔日誌」を読むことによつて、直治が慕っている作家の上原と六年前に会つた出来事を回想する。「恋」の対象が、ここでようやくその姿を現す。「私」が上原のことを書けるようになったのは、直治の「夕顔日誌」を読んだからに他ならない。

「四」は、「私」が上原へ宛てた三通の手紙で構成されている。「五」に「ことしの夏、或る男のひとに、三つの手紙を差し上げた」とあるので、「三」が執筆されてからそれほど時間が経っていない時期に書かれたものと思われる。この三通の手紙の書き手である「私」は、「一」から「三」に至る手記の書き手である「私」とは異なるものとして登場している。つまり、手紙と手記とは、かなり文体が異なる。具体的な宛名に向けて書かれたわけではない手記とは違い、手紙は、上原という具体的な宛名に向けられた誘惑する身振りに満ちているのだ。

その三通目で、「私」の「札つきの不良」という言葉に対して、母親が「札つきなら、かへつて安全でいいぢやない

の」と言つたということが書かれている。「三」で直治の「夕顔日誌」から「不良」という言葉に新たな意味内容を付与できた「私」は、今度は母親の言葉から「札つきの不良」という言葉をポジティブなものとして捉えることができるようになったのである。そして「私」は「札つきの不良」である上原の子どもが欲しいのだと書く。そこに、死産したという「私」の過去が関わっていることは、読者であればすぐに気づくだろう。「三」においても、「私」は母親に対して、「子どもがないからよ」という「自分でも全く思ひがけなかつた言葉」を口に出してしまう場面が描かれていたのだから。だが、そうした事実は知らないはずの上原にとつて、子どもが欲しいのだという「私」の言葉は自身を性的に誘惑する言葉でしかない。「私」の手紙の言葉は、「一」から「三」にいたる「私」の手記を読んでいるかどうかで、異なる意味を読み手に与えることになる。

三、「黄昏」と「朝」

「五」では、上原からの返信が来ないことに焦れた「私」が、上京して直接上原に会いに行こうと考えていると、母親の体調が急激に悪化する。それで「私」の上原への攻勢は、いったん小休止ということになるのである。

そして、ローザ・ルクセンブルグ『経済学入門』（叢文

閣、一九二六)の読み手としての「私」が登場する。「私」はその本から、経済についての知見を学んでいるわけではない。「経済学として読むと、まことにつまらない。実に単純でわかり切った事ばかりだ」とさえ「私」は書く。だが「私」は、著者の「片端から旧来の思想を破壊して行くがむしやらかな勇氣」に興奮し、「いつたん破壊すれば、永遠に完成の日が来ないかも知れぬのに、それでも、したふ恋ゆゑに、破壊しなければならぬのだ。革命を起さなければならぬのだ。ローザはマルキシズムに、悲しくひたむきの恋をしてゐる」と、「革命」を指す著者の姿勢に「恋」を見出す。

『経済学入門』という書物を読むことによつて、「私」のなかで「恋」と「革命」とが結びつく。「私」は、他者によつて〈書かれたもの〉をきわめて独特なやり方で自身のものとしていくのである。

そして「私」は十二年前の出来事を回想する。友人が貸してくれたレーニンの本を読まずに返した「私」が、その友人から「あなたは、更科日記の少女なのね」と言われた思い出であるが、現在の「私」は、「あれから十二年たつたけれども、私はやつぱり更科日記から一步も進んでゐなかつた」として、次のように書く。

いままで世間のおとなたちは、この革命と恋の二つを、最も愚かしく、いまはしいものとして私たちに教へ、戦

争の前も、戦争中も、私たちはそのとほりに思ひ込んでゐたのだが、敗戦後、私たちは世間のおとなを信頼しなくなつて、何でもあのひとたちの言ふ事の反対のはうに本当の生きる道があるやうな気がして来て、革命も恋も、実はこの世で最もよくて、おいしい事で、あまりいい事だから、おとなのひとたちは意地わるく私たちに青い葡萄だと嘘ついて教へてゐたのに違ひないと思ふやうになつたのだ。私は確信したい。人間は恋と革命のために生れて来たのだ。

ここでは、「敗戦後」の「私たち」の変化が語られてゐる。ここでの「私たち」は、「私」と母親とを指しているわけでもなければ、ましてや「私」や直治を含む「高等御食」のことを指しているわけでもない。それは、戦中と戦後で変わつてゐるようであり、実は本質的な部分では何ら変わつてゐない「世間のおとな」に對置されるような存在なのだ。ここで「私」の手記は、初めて明確な宛先を得たのだと言ふこともできるだろう。それは、「敗戦」を境にして、表面的な部分ではなく本質的な部分において変化している、あるいは変化しようとしている「私たち」に他ならない。以後、「私」の手記は基本的に「私たち」に向けて書かれてゐると考えられる。

母親の死を経て、「六」の冒頭で「私」は「戦闘、開始。」

と書く⁹⁾。いよいよ上京して、上原に直接会うことにしたのである。「私」は『聖書』マタイ伝福音書の言葉をも利用しながら、我が身を奮い立たせていくのである。「何だかわからぬ愛のために、恋のために、その悲しさのために、身と靈魂とをゲヘナにて滅し得る者、ああ、私は自分こそ、それだと言ひ張りたいのだ」。

しかし、そのようにして西荻窪の飲み屋で再会した上原は「まるつきり、もう、違つたひとになつてゐる」のであり、すっかり外見がみすばらしくなつた上原のことを「一匹の老猿」とさえ「私」は書く。まさしく「反恋愛小説」とでも言えるような展開なのだが、「私」は来たばかりで帰ることもできず、上原たちの宴会の様を眺める。

飲み屋で上原を含む一〇人ばかりの人間は「ギロチン、ギロチン、シウルシユシユシユ」という乾杯のかけ声で「はずみをつけて、無理にお酒を喉に流し込んでゐる様子であつた」。山崎正純はその乾杯のかけ声に、ついに自らの手で「革命」を果すことができず、「配給された自由」¹⁰⁾を享受するしかなかつた者たちの「決定的な無力感」¹¹⁾を見ているが、おそらくそれは正しい。そのかけ声を唱和する者の一人は、次のように言う。「これから東京で生活して行くにはだね、コンチワア、という軽薄きはまる挨拶が平気で出来るやうでなければ、とても駄目だね。(中略) 重厚? 誠実? ベツ、ブツだ。生きて行けやしねえぢやないか」。

その夜、「私」と上原は関係を持つ。上原にとっては、それは「私」の望みに応えてした行為であつたのだろうが、もはや「その恋は、消えてゐた」「私」にとっては、上原に強いられて仕方なくした行為でしかなかつた。だが「私」は、翌朝、「部屋が薄明るくな」るなかで、寝ている上原の顔を見て、「貴い犠牲者」であると思う。再会するまでの上原は「札つきの不良」としての価値があつたが、いまでは時代の「犠牲者」として、上原にあらためて価値が見出されるのだ。そこでは、「かうでもしなければ、生きて行かれないのかも知れない」として、上原のみすばらしくなつた外見も、粗悪な言動も、すべてが許されるのである。

いまが幸福だと述べる「私」に対して、上原は「でも、もう、おそいなあ。黄昏だ」と言い、「私」はそれに「朝ですわ」と答える。部屋のなかに差す日の光は、文字通りの「斜陽」だと言えるだろう。上原にとって「黄昏」として捉えられるものが、「私」にとつては「朝」を意味する。ここで「斜陽」というタイトルの両義性が明らかとなる。通常、「斜陽」といえば夕日を意味するが、実はこの作品においては朝日であるかもしれないのだ。だから、この作品に「滅び」だけを見出すのは適当ではない。『斜陽』という作品は、見方によつて、「黄昏」を描いたものにも「朝」を描いたものにも変わりうるのである。

四、「私」の変貌

「七」の大部分は直治の遺書であり、「八」の大部分は「私」が上原へ宛てた手紙である。それ以外の「私」の手記としては、「七」では「直治の遺書。」という言葉が直治の遺書の直前に置かれているだけだし、「八」では、手紙の前に「皆が、私から離れて行く」などという四行ほどの短いコメントがあるだけだ。「僕は、貴族です」と最後に書きつけている直治の遺書を「私」はどのような気持ちで読んだのだろうか。そのような疑問について、『斜陽』という作品は少しも答えようとはしない。

たとえば、「きつと姉さんは、結婚なさつて、子供が出来て、夫にたよつて生き抜いて行くのではないかと僕は、思つてゐるんです」という箇所など、直治が結局は旧来の価値観を相対化することのできないままだったことを窺い知ることのできる記述が散見され、それらに「私」が肯定的な感情を持つということは想像しづらい。が、「私」は特に何の論評も加えようとはしないのだ。

「八」の上原へ宛てた手紙のなかで、「あなたの人格のくだらなさを、私はこないだも或るひとから、さまざま承りました」とあるのは直治の遺書を踏まえた記述であると思われる。続けて「私」は「でも、私にこんな強さを与えて下さったのは、あなたです。私の胸に、革命の虹をかけて下さった

のはあなたです。生きる目標を与えて下さったのは、あなたです」と書いており、直治の上原に対する見方を肯定はしていないようではあるものの、それもつきりとはわからない。「私」は自身が上原に「捨てられ」たと書くが、実は直治の遺書を読んだ結果として、「私」のほうから積極的に上原から離れようとしているとも考えられる。

「私」は「革命」について、手紙のなかで次のように書く。

革命は、いつたい、どこで行はれてゐるのでせう。すくなくとも、私たちの身のまはりに於いては、古い道徳はやつぱりそのまま、みぢんも変らず、私たちの行く手をさへぎつてゐます。海の表面の波は何やら騒いでゐても、その底の海水は、革命どころか、みじろぎもせず、狸寝入で寝そべつてゐるんですもの。

ここでは、「海の表面の波」と「その底の海水」とが対比され、前者は「騒いでい」るが、後者は「狸寝入りで寝そべつてゐる」のだとされる。戦時中から戦後へと変わり、表面的には軍国主義から民主主義の社会へと変わったようである、実はその本質は少しも変わっていないのだ。直治の遺書の言葉を使つていえば、マルキシズムも民主主義も、この国では「牛太郎」の論理にすり替わつてしまう。戦後の民主主義を、いや戦時中の軍国主義でさえも、それを本当に理解し

たり、信じたりした者がいったい、どれほどいただろうか。

ローザ・ルクセンブルグの『経済学入門』を読むことにより「恋」と結びついた「革命」という語は、この最後の手紙において「道徳革命」という語へと変化している。「一」での「いつはり」の「安穩」とは「私」にとつて、「私」と「お母さま」によつて構成される日々でしかなかったはずだが、さまざまな本や、直治の手記や遺書などを読むことによつて、「私」の視線は社会全体へと向くようになったのだと言えよう。

もちろん、「私」の未来が明るいものとは限らない。「私」は「これまでの第一回戦では、古い道徳をわづかながら押しつけ得たと思つてゐます。さうして、こんどは、生れる子と共に、第二回戦、第三回戦をたたかふつもりであるのです」と書くが、第二回戦、第三回戦どころか、第一回戦でさえ「私」の優勢であると認める読者はかりではないだろう。

だが、「マリヤが、たとひ夫の子でない子を生んでも、マリヤに輝く誇りがあつたら、それは聖母子になるのでございませぬ」と「私」が言うように、世間一般において「負け」であつても、その当人にあつては「勝ち」であるということはあるし、やがてはその子どもが世界を変えていくことになつていくということも無いわけではないのだ。

「私」の手記が「私たち」に向けて書かれていたことを思い出そう。「世間のおとな」に對置される「私たち」であれ

ば、「滅び」ではなく「再生」を、「黄昏」ではなく「朝」を感じる事ができるはずである。そして、そうした「私たち」によつて、「狸寝入りで寝そべつてゐる」世界を変えていくことも、あるいは可能であるのかもしれない。

もつとも、〈書かれたもの〉はコンテキストによつて意味が容易に変わりうる。最後の手紙を書いたときの「私」の状況や、その後の「私」についての情報が「斜陽」にはあまりにも少ないことは確かだ。高田知波が「書簡部分の高揚したトーンと、章頭に付された短いコメント部分の沈んだトーンとの落差は、「最後の手紙」の言葉をかす子の到達点として絶対化させない機能を果たしている」と指摘しているように、最後の手紙がどこまで「私」の真意を表しているかという点、実は確定しがたいのである。最後の手紙の高揚した言葉は、精一杯の負け惜しみに過ぎないのかもしれない。

言い換えれば、〈書かれたもの〉の集積である『斜陽』は、読者によつて異なる結末へと開かれているのだ。「私たち」に含まれると感じる読者であれば、第二回戦、第三回戦へと続く「道徳革命」の道程が仄見えてくるだろうし、そうではない読者であれば、かす子が「滅び」へと向かつていく哀愁を感じ取ることができるだろう。果たしてその斜めに差す日の光は、夕日だろうか、それとも朝日だろうか――？

注

- (1) たとえば、奥野健男『斜陽』小論（『近代文学』一九五三・六）は「四人の登場人物は皆作者の分身であり、『斜陽』はこの四人四様の滅びの宴です」と述べ、饗庭孝男『太宰治論』（講談社、一九七六・一二）は、「四人の登場人物のいずれもが、太宰の過去、現在、そしてあるべき姿を分有しながらあらわれて」と述べている。だが、こうした捉え方には多くの問題がある。たとえば、花岡紗椰香『斜陽』論——復員者という視点で見る直治（『日本文学研究』二〇一八・二）が指摘しているように、直治は作者・太宰とは実際には異なる点が多々あるにも関わらず、太宰の過去を反映した人物として捉えられることによって、太宰とは異なる特徴（復員者であることなど）が不可視化されてしまうのである。
- (2) 高田知波『斜陽』論——ふたつの「斜陽」・変貌する語り手（『国文学』一九九一・四）
- (3) 斎藤理生『太陽と言葉——『斜陽』試論』（『太宰治スタディーズ』二〇〇六・六）
- (4) 榊原理智『語る行為の小説——『斜陽』の消滅する語り手』（『日本文学』一九九七・三）
- (5) 石井洋二郎『身体小説論——漱石・谷崎・太宰』（藤原書店、一九九八・一二）は、「お母さま」の傍らにいる「私」に「男性化への傾斜」や「両性具有的曖昧さ」を見出している。
- (6) 安藤宏『太宰治論』（東京大学出版部、二〇二一・一二）は、「この回想部は決して単なる過去の再現ではなく、あくまでも〈夕顔日誌〉に触発され、あらためて直治を中心にか
- ず子の中で創り直された『過去』に他ならない」と指摘している。
- (7) 『斜陽』の前半の多くがそうであるように、この箇所も太田静子の日記を元にして書かれているが、その日記には「敗戦後、私たちは世間のおとなを信用しなくなつて」などという記述は見られない。小森陽一「解説」（『斜陽日記』小学館、一九九八・六）が言うように、『斜陽』では「この部分に、戦前、戦中と、「敗戦後」の決定的な思想の分岐点であるという意味づけがなされている」と言えるだろう。ちなみに静子の日記は太宰の死後、『斜陽日記』（石狩書房、一九四八・一〇）として刊行された。『斜陽』と『斜陽日記』との関係については、相馬正一『斜陽日記』のオリジナルティ——創作「相模曾我日記」の活字化（『国文学』一九九九・六）を参照。
- (8) 中村三春『斜陽』のデカダンスと「革命」——属領化するレトリック（『国文学』一九九九・六）は、この作品に「あるコミュニティを否定し、別のコミュニティを打ち立てる」運動を見出している。その論理に従えば、ここで「私」は「おとな」に対峙する「私たち」というコミュニティを打ち立てたのである。
- (9) 前田愛が瀬戸内晴美との対談（『名作のなかの女たち』角川書店、一九八四・一〇）で述べているように、「戦闘、開始」という言葉は、山崎富栄の日記（一九四七年三月二十七日）から取られていると考えられるだろう。「戦闘開始！覚悟をしなければならぬ。私は先生を敬愛する」（山崎富栄『愛は死と共に』石狩書房、一九四八・九）。

(10) 高田前掲論文

(11) 河上徹太郎「配給された自由」(『東京新聞』一九四五・一〇・二六、二七)は、「自由も配給品の一つとして結構珍重されてゐる。(中略)しかも今の場合、此の自由が亦舶来と来てゐる」と皮肉な調子でGHQの占領下に置かれている日本の状況を評している。河上の書きぶりに違和感を表明する中野重治「冬に入る」(『展望』一九四六・一)もまた、「日本の国民が今持つてゐる自由はたしかに国民がこれを全面的に獲得したものではない。日本の国民は、王の処刑をふくむ革命の実行をしたものでもなく、バスチーユの破壊を実行したものでなかつた。それは(中略)いはば外側から与へられたものであつた」としており、占領期日本の「自由」が「外側から与へられたもの」であるという前提自体は共有している。

(12) 山崎正純「斜陽」——敗戦後思想と〈革命〉の 에스キス」(『国文学』二〇〇二・一一)。ただし、山崎は一九四六年前半に「決定的な無力感を強烈な倫理性へと読み替えるまなざしの社会的規模での消滅」を見出しているが、そんなまなざしを備えていた人間はもともと中野重治ほか少数でしかなかつただろう。もともとなかつたものを失われたものとして表象するのは、GHQによる占領期検閲に歪められる前の「真正な言語空間」を無想してしまう江藤淳『閉された言語空間——占領軍の検閲と戦後日本』(『文藝春秋』一九八九・八)と同種のロマンティズムに陥つていると言わざるを得ない。

(13) 「私」は「レニン選集、それからカウツキイの「社会革命」

など」も直治の部屋から借りて自分の机の上に置いていたのであり、それらも読んだ可能性は十分にあるだろう。

(14) 高田前掲論文

※本文の引用は、『太宰治全集』第一〇巻(筑摩書房、一九九九・一)に拠る。